

魏源の老子論及び老子思想と儒釈思想の異同

張 明 輝

一

魏源は一七九四年生れ、晩清の著名な思想家である。彼の思想中で現実関心の精神はかなり強かった。彼は「通経致用」を提唱し、理学家の心性について迂遠な議論をする治学方法に反対し、すでに弊害が生じた政治制度を改善すべきであると主張するのである。彼は中国伝統社会に活き、また外来の衝撃を受けた時代でもあり、中国の伝統社会と文化はこの衝撃に対して無力状態なるを痛感し、統治者が実用技術は奇技淫巧なものであると、軽蔑する観念を改めることを希望し、しかも努力して「師夷長技」を学習し、これによって「制夷」の目的を到達するのである。彼のこの観点から見れば、彼は依然として中国の伝統文化を保持することを希望したが、これは一つの改変できない前提であり、ただこの一つの前提の十分な保証があつて、はじめてこの基礎の上から西洋の先進技術を学習することが許されるのである。またこの技術を用いて外来文化の衝撃を制圧し、中国の伝統的社会と文化を延長継続をさせようとしたのである。

魏源は一人の中国伝統文化環境中の知識分子であり、彼が「師夷長技」の主張を提出することは、ほかの中国伝統の知

識分子に比べるとその独創的見解は大したものである。但し彼が学習研究する所の思想文化は依然として中国伝統的な思想文化であり、この一点はすなわち彼の外来文化に対する態度を決定するものである。わずかにただ「師夷之長技」を学習するのみである。彼はすでに受けたものを投げ捨て別の文化に変更して取りかえることができず、西洋文化を受け入れることができないわけである。だから彼はただ中国の伝統文化知識を運用して自分の思想と主張を論述するのである。たとえば彼が今文経学を愛好し、《公羊春秋》を学習し、また《古微堂集》・《元史新編》・《老子本義》・《詩古微》・等を著作したが、すべては伝統文化の旧有の内容中に彼の思考と研究を進行するのである。この一現象は彼の老学思想を理解するときに重要な意義があるのである。

老学史の観点から見ると、彼の《老子本義》・《論老子》の著作はもちろんだ伝統意義上の研究なのであって、老子思想の論述について異質なものを生みだすことはありえないのである。これはすなわち魏源の老学研究の内容を決定したわけであり、全体封建時代の学者に比べると質の区別はないのである。彼の研究の特色はただ彼の関心を抱いた問題点が以前の学者と異なることで、具体的に言えばすなわち彼の老学思想中には明らかに現実に対し関心を有する成分を帯びている。これは彼が現実政治と国情に対する思考を行う必然的な結果である。

二 《老子》は救世書である

魏源は《老子》を研究するたびに内心に強烈な現実感をいだく。これは清朝の考証学派が学術のため学術を研究する治学態度とかなり違うのである。魏源の《老子本義》と彼の《論老子》を見ると、彼の治学精神の中に一個突出の考えを発見することができ、すなわち学術は必ず現実政治に関心すべきであるとする。言いかえれば学問の研究は空洞無物や現実

を離脱する道を歩んではいけないのである。この種の構想に基づいて、従来人々に現実の社会生活より退職して隠居することと見なされてきた老子の《道德經》は、却って魏源には救世の書であり、現実社会と緊密な関係がある思想的な著作と解釈されたのである。

魏源はその《論老子》之二の中に明白に言う。

「聖人經世之書。而《老子》救世之書也。使生成周比戸可封之時、則亦嘿爾已矣。」

《老子本義》中にまたしばしば言う。

「老子。救世之書也。」（見《老子本義》第三章）

「老子見學術日歧。滯有溺迹。思以眞常不弊之道救之。」（見《老子本義》第一章）

「源案此老子憫時救世之心。」（見《老子本義》第六章）

彼の「救世」とはすなわち「遂以太古之治矯末世之弊。」（見《老子本義》第三章）。魏源は老子が《老子》の書を著した理由は彼の思想と主張を用いて世を救おうとしたと見る。なぜならば世道はすでに変じて弊害を生じたので、だから老子はこの眞常不変の道を闡明にした。彼の著書の目的はすなわち世の人にこの種の眞道を説明し、理解をさせこの種の眞道に照らして行わせるためで、また統治者に対してもいかにこの種の眞道を按じて国家人民を統治すべきであるを理解させるのである。

魏源から見ると、最初の社会は太古の世であり、あの時の政治は太古の治と言うのであり、これは最も理想的な政治状態である。但し社会は却って永遠にあの美好な社会政治を保持することができず、必ずよくない社会政治の方向へ転変するのである。これはすなわち魏源が言うところの「遞相嬗変」に必ずなり、しかも変われば変わるほど悪くなり、最

とも悪いときに、すなわち「末世」と言うのである。

「氣化遞嬗・如寒暑然・太古之不能不唐虞三代。唐虞三代之不能不後世。一家之高曾祖父子姓。有不能同。故忠質文皆遞以救弊。而弊極則將復返其初。」（見《論老子》之二）。

老子の生活時代、すでに太古の世ではない。彼はすでに太古の治を見ることができず、更にその次級の唐虞三代さえも彼はただ歴史の記載を通して理解するしかないのである。実際に老子が直面しているのはすなわち「弊極」の「後世」である。もし太古の治及び唐虞三代の立派な政治との比較がなければ、おそらく人たちが直面している悪劣な政治と社会にあれば反感と厭惡をしないであろう。だから一人の史官の立場から言う現実社会の劣悪さに対し普通の人に比べると更に深刻な感受があるのである。だから老子はこの種の「弊極」な「後世」の社会のうちに在ってまた現実政治状況に対する不満によって彼の深刻な思索を促したのである。もし現実の社会政治は太古の治であり、或は魏源の言ところの「成周比戸可封之時」の治世であるならば老子は沈黙してなにも言わなかったであろう。しかし現実はそうではなかった。だから彼は太古の治である眞常の道に関して論述しなければならぬし、またこれをもって世を救うことを意図するのである。すなわち太古の治の主張は正に彼が史官としてはじめて獲得ができる豊富な歴史知識を根拠として形成されたものである。この点についてわれわれは特別な注意が要するのである。

またほかの一面から言う老子が大なる政治力を掌握して彼の政治主張を推行することは不可能である。しかし彼は正直な政治観念を持っていて、現実の政治が人々に満足させることができない状況のもとで老子のような古代知識分子ができることはただ著書立説のみであり、世間の人たちのために一道理を説くにあるのである。勿論彼の著書立説の目的はただこの書物を用いて自己死後の名聲を樹立する考えではなく而も自分の思想主張を用いて現実社会に対しいささかの切実

な影響を希望するのである。魏源はこのような角度から出発して老子の著書立説の動機を分析したのである。故に魏源が言う。

「吏隠静観。深疾末世用禮之失。疾之甚則思古益篤。思之篤則求之益深。懷德抱道。白首而後著書。其意不返斯世於太古淳樸不止也。」（見《論老子》之二）

老子の「懷德抱道」はこれ正に古代知識人の特有な文化素養の表現である。彼の白首にしてのちに著書することはすなわち老子のような知識人が現実社会に対する関心を反映するのである。ただ人生の最後の時刻に到達してはじめて比較的成熟な形式を以って世間に発表するのである。これは彼が一生の中で「静観」、「深疾」、「篤志」、「深求」などを経過したのちにはじめて形成された結果であり、その中に必ず彼の「不返斯世於太古淳樸而不止」という強烈な念願を深く蘊蓄するのである。魏源が老子の著書の背後のこの種の情緒を発明することは、正に魏源自身の同類の心情を思案の経歴を反映するのである。

魏源は以上の分析を通過して老子の著書は救世のための念願を明らかにするとみたが、これはすなわち歴来人々が《老子》の書に対する普遍的な見方を完全否定するのである。《老子》の書は魏源の考えから見ると、根本的には個人の退隠避世のために作ったものではなく、正に相反するものである。この一部の玄妙な著作はまさに一個強烈な現実感を持つ老知識人の深く考えた作である。彼の中心的思想は現実社会に対する不満であり、これは現実社会に対し改めたい、また朦朧不覚な世間人に対し救済したい。また聖人式な政治家の出現で世界を改めることを期待するのである。

もし老子のこの心理状態を了解したうえで更に老子の言うところの「無為而無不為」を理解しようとすれば、人々はおそらく完全に過去と違った認識が生じよう。時世は必ず変わるものであり、太古の治はすでに唐虞三代の治に変わり、さ

らに成周の「比戸可封」の治に変わり、さらに「弊極の末世」に変わったのである。この種の変遷はここまで止まらず、それはまた継続して変わってゆくのである。老子の思想と希望は正にこの継続してたえず変化する上に委託するのである。

老子はすでに物事の変化の規律を総括したのである。これはすなわち「反者道之動・物極必反。」のことであり、同じ道理で、社会の発展変化も同様でただ「弊極則將復返其初。」ということになると考えた。そういうことなら、太古の良治より末世の悪治への変化はすでに一端の極まりに到達したと言えるであろう。それでつぎの一步の変化はもうすぐ相反する方向へ転換するのである。老子はこのことに対し確信して疑わないのである。勿論この変化はすぐに完成するものではなく、老子がこの世に生きているときに明らかにこの喜しい変化を見ることはもうできないのである。しかし老子はこのために自信を失うことはないようで、老子は「去甚去泰去奢之指。必有時而信於天下。」（見《論老子》之二）のことを信じるのである。彼の著書はすなわちこの良い変化にすこしでも推し進める力を加えたいのである。言いかえれば時世の変化が予測できる以上、この変化がしばらく来なくても構わず、結局ある人がこの変化を理論上から説明する必要があるのである。この種の理論の早期準備はその後の現実の実現に対し、その間に一定の関連が存在しているのである。魏源の言葉を用いて言うとなわち「啓先機」である。

「孔子寧儉毋奢。為禮之本。欲以忠質救文勝。是老子淳樸忠信之教。不可謂非其時。而啓西漢先機也。」（見《論老子》之二）。

これを以て魏源は孔子の思想の「忠質救文勝」は老子の「淳樸忠信之教。」と実質上において同じものであると見做すのである。孔子の思想が人々の推崇を得た以上、老子の思想も時世に合わないと言えないのである。魏源は歴史の発展から見れば老子の思想は西漢の無為の治に対し「啓先機」の作用を起したと見做すのである。この一点に基づいて魏源は老

子思想の「無為而無不為」に対し新しい見方を生み出したのであり、これによって敢えて老子の思想は人たちに退隱し、しかも世事をかまわない哲学を教えたのではないことを肯定するのである。

三 救世と太古の治

魏源が《老子》の書は一部救世の書であることを言うわけはその關鍵は彼が老子思想中の太古の治の内容に対し明らかにすることにあるのである。魏源が老子思想中の太古の治の思想を論述するについては大体三方面的の内容があるのである。即ち太古の治は老子の理想的社会であり、最も良い政治である。また太古の治の要点は「無知無欲無為」を以て天下国家と社会を治めるのである。しかも末世の政治はまさに逆方向に向かって進むのである。末世の弊害を救い、太古の治を回復したいからにはその根本的な方策はすなわち無知・無欲・無為などの道理を人たちに教え理解させるのである。西漢の政治はこの思想を運用して成功した模範例である。老子の救世思想と太古の治の理想は現実で実行できることであり、空言ではないことを証明したものである。

魏源はその《論老子》之二の中に言う、「老子道太古道・書太古書也。」その意味は老子の思想はすなわち太古の治の道理に関するものであり、《老子》の書はすなわちこの道理を説明するものである。なぜ老子が太古の治を論述したかったのか、なぜならば太古の道は老子の目から見ればすなわち国家政治の根本原則である。魏源が《論老子》之一の中に、後世の人が老子思想に対し歪曲することを批評した後で言う。

「盍返其本矣。本何也。即所謂宗與君也。於萬物為母。於人為嬰兒。於天下為百谷王。於世為太古。於用為雌為下為玄。」

どんな物にもかかわらず必ず一個の根本があり、「世」の方面においては、その根本はすなわち「太古」である。言いかえれば太古の世はすなわちその他の世の道の根本であり、あるいは理想である。世の道は太古にしかずとはすなわち、理想の世の道に合わないのである。だから老子の思想を理解したいならばすなわち太古の治の根本をしっかりとつかむのであり、天下国家と社会を治めたいならば同様にこの根本を逸脱することはできないのである。老子の書とその道はすべてこの根本問題を取り囲んで展開されたものであり、故にその道を太古の道、その書を太古の書と称したわけである。老子はすなわち太古社会のこの政治理想を保存し続けたい、並びにそれをもう一度新たに現実社会の中に実現させたいのである。

魏源から見れば、老子が相い信ずる太古の治は即ち太上の治であると見做し、だから彼はまた太古の治を「太上」とも言うのである。

「太上未嘗自謂有知。未嘗見有可欲。故其治世也亦然。」（見《老子本義》第三章）。

いわゆる「太上」とはすなわち最上・極上のことである。老子が太古の治を最も良い世の道と見做すことを表明したのである。だから魏源が太古の治はすなわち老子の理想政治であることを言うのである。以上の言葉によると魏源が言うところの太古の治の根本的特点を見出すことができる。すなわち無知・無欲である。このほかに魏源にはこの問題に対してさらに明確な説明があるのである。例えば、

「反本則無欲。無欲則至柔。故無為而無不為。以是讀太古書。庶幾哉。庶幾哉。」（見《論老子》之一）。

これはただ「無欲」・「無為而無不為」の道理を理解すればはじめて《老子》の書を読み解けるのである。魏源はまた太古の治に相反する末世の乱はすなわち「有為」によって起ったと言うのである。

「夫世之不治。以有為亂之也。」（見《老子本義》第三章。）

しかも有為の根源は有欲・有知にある。

「有為由於有欲。有欲由於有知。」（見《老子本義》第三章。）

人欲の氾濫によつてもたらされた危害は主な表現は、「有為」、「争強」、「争勝」などである。これはすなわち世を治めることができない原因であり、すなわち世道が悪く乱れる根源である。

「天下方務於剛強・而剛強莫勝於争戰。」（見《老子本義》第五八章。）

魏源が老子の思想を運用して太古の治と末世の弊害などを分析し、末世弊害の根本的な原因は人欲の氾濫であり、したがつて無数の戦争を引き起こし、社会と人民に対し莫大な破壊と苦痛をもたらすことを見抜くのである。だから老子が説いた太古の治の無為の道を用いて末世の争奪の弊害を救いたいののである。《老子》の書はすなわちこの道理を説いたのであり、だから魏源が《老子》の書は上には道を明らかにすることができし、中には身を治めることができし、下には人を治めることができし、どんなに利用しても有効であることを言うのである。

「蓋《老子》之書。上之可以明道。中之可以治身。推之可以治人。其言常通於是三者。」（見《老子本義》第五章。）

魏源は老子が無為はすなわち太古の治の關鍵であり、太古の道で天下を治められると信ずるわけはすなわちこの「無為而治」にあると考えるのである。

「豈自然不可治身。無為不可治天下哉。老之自然。從虛極靜篤中。得其體之至嚴至密者以為本。欲靜不欲躁。欲重不欲輕。欲嗇不欲豐。容勝苛。畏勝肆。要勝煩。故於事恒因而不倡。迫而後動。不先事而為。夫是之謂自然也。豈滉蕩為自然乎。其無為治天下。非治之而不治。乃不治以治之也。」（見《論老子》之三。）

魏源は老子の太古の治はすなわち無為を以て天下を治めることだと考えるのであり、その具体的な方法で主要なのは、「功惟不居故不去。名為不爭故莫爭。凶難於易。故終無難。不貴難得之貨。而非棄有用於地也。兵不得已用之。未嘗不用兵也。去甚去奢去泰。非並常事去之也。治大国若烹小鮮。但不傷之。即所保全之也。以退為進。以勝為不美。以無用為用。孰謂無為不是治天下乎。」（見《論老子》之三。）

彼のこれらの方法を用いて完全に天下を治めることができ、別に玄妙なことではないのである。但し魏源も老子の無為の思想は容易に人に受け入れられないことを看て、故に彼は特に老子の著書の此の道を明らかにする重要性を説明するのである。

「老子著書。明道救時。……今將救其弊。而返以慈儉謙退。則天下必以為不適於用。故即其所明者以喻之。言吾之道無施而不可。雖用之以戰守。亦無不勝且固者。蓋慈則必儉。慈則必不敢為先。是即兵家以退為進以弱為強之道。」（見《老子本義》第五八章。）

魏源はすでに《老子》の書を通して太古の道を理解し、またこの道理が世間に運用することが可能であることを信じるのである。彼がこの点を堅く信じた最も説得力がある証拠はすなわち西漢時代に黄老の学を運用して文景の治を得た歴史事実である。

魏源が説く、

「夫治始黄帝。成於堯。備於三代。殲於秦。迨漢氣運再造。民脫水火。登衽席。亦啻太古矣。則曹參文景。斲珣為樸。網漏吞舟。而天下化之。蓋毒痛乎秦。酷剂峻攻乎項。一旦清涼和解之。漸進飲食而勿藥自愈。蓋病因藥發者。則不藥亦得中醫。與至人無病之說。勢易而道同也。孰謂末世與太古如夢覺不相入乎。」（見《論老子》之二。）

西漢時代の文景の治はかりに末世に着いたとしても、ただ老子の太古の治を運用すれば乱れた世の道を改めることができることを証明するのである。魏源はまた「無為之治」を分けて言う、

「老子書賅古今。通上下。上焉者義皇關尹治之以明道。中焉者良參文景治之以濟世。下焉者明太祖誦民不畏死而心滅。宋太祖聞佳兵不祥之戒而動色。」（見《論老子》之二。）

時世はすでに太古の時世ではなく、すなわち完全に太古の治世へ回復することはできないことは魏源も分かるのである。但しこの時勢のもとでなおさら太古の道を語ることはその現実的意義があるのである。

「老子欲反太古之治。世之去太古遠矣。其遂可盡復乎。曰未可也。未可而言之。何也。夫衰周文弊。淳質亡喪盡矣。

非大道不足使人反性命之情。言道而不及其世。不足以知大道之已試。此其所以必反太古之治也。」（見《老子本義》第六章。）

人はその力を尽さなければいけないのであり、但し効果の如何はただ自然に委せるしかないのである。いわゆる人力を尽し天命を待つのである。だから百パーセント太古の治に到達できない情況の下で太古の道を語るのはすなわち末世を矯正したためにやむをえないことである。

しかし魏源は歴史上において老子のいわゆる太古の道を運用して成功を取得したことが絶対ありえなかったとはかぎらず、例えば西漢時代の文帝・景帝・曹參・蓋公・汲黯・張良などの人たちはすなわちこの種の成功者であることを考えたのである。

「漢人學黃老者。蓋公曹參汲黯為用世之學。疏廣劉德為知足之學。四皓為隱退之學。子房猶龍。出入三者。體用從容。漢宣始承黃老。濟以申韓。其謂王伯雜用。亦謂黃老王而申韓伯也。惟孔明澹泊寧靜。法制嚴平。似黃老非黃老。手写

申韓教後主。而實非常申韓。嗚呼。甘酸辛苦味不同。蘄於適口・藥無偏勝。对症為功。在人用之而已。」（見《論老子》之三。）

魏源は彼らが老子の太古の道を自身に運用するときになわち自我を義皇の境地に到達させることができると認めた。もしそれを社会及び天下に推し広めるとすなわち太古の治のような効果を獲得することができるのである。これはあの老子思想の運用を歪曲する人たちと比べ物にならないのである。

「如蓋公黃石之徒。斂之一身。而微妙渾然。則在我之身已義皇矣。即推之世而去甚去奢。化嬴秦酷烈為文景刑措。亦不啻後世義皇矣。豈若刑名清談長生之小用而小弊。大用而大弊邪。」（見《論老子》之一。）

魏源は西漢時代の人が老子太古の道を運用して成功した方法を総括して、その中の關鍵は、

「黃老靜觀萬物之變。而得其闔闢之樞。惟逆而忍之。靜勝動。牝制牡。柔勝剛。欲上先下。知雄守雌。外其身而身存。無私故能成其私。所謂反者道之動。弱者道之用也。」（見《論老子》之三。）

これこそ本当に老子無為の道の精巧を用いて世道を治め範例であり、申韓刑名学家及び明太祖・宋太祖の流は比べ物にならないのである。

三 老子に対する誤解及び儒仏との關係

魏源は《老子》の書は、從來人たちに誤解され続け故に老子思想の真の内包を認識することができないのであると主張した。例えば彼が《論老子》之一中に説くように、

「文景曹參之學。豈深於嵇阮王何乎。而西漢西晉燕越焉。則晉人以莊焉老。而漢人以老為老也。」

真実に老子の道を用いねばすなわち世を治めることが可能であり、真実に老子の道を用いないとすなわち世を乱すのである。老子の学は完全に政治に有益な學術思想であり、一種単純な哲学体系ではないことを表明したのである。もしただ學術あるいは哲学のレベルの上から見ると西漢時代の文帝・景帝・曹参などは西晋時代の嵇康・阮籍・王戎・何晏などに比べ物にならないのである。しかし文帝・景帝・曹参などが黄老の学を運用して西漢の政治を良くやったのでそこでも嵇康・阮籍・王戎・何晏などの老子学はすなわち架空な學術である。西晋の政治に対し根本的な機能を發揮することがなかったのである。ここから見れば同様に老子の学を研究し学習することで却ってはつきり異なっている効果があるのである。魏源は、晋の人が「莊を以て老と為す」のはこれはすなわち双方が老子の学を研究する思考上の筋みちの不同によると説明するのである。「莊を以て老と為す」とは老子の思想を歪曲したものであり、「老を以て老と為す」ことは本当に正確に老子の思想を運用したものである。ただ老子思想を正確に理解することで始めて老子の思想を正確に運用することができるのである。魏晋時代の玄学は老子の学を盛んに議論するといえども、但しそれは老子思想の原意と全く反対の方へ走った空論にすぎないのである。だから魏晋時代の玄学家あるいは清流名士たちは真の老子思想の真理を得られなかったのである。

歴史上において多くの人が老子思想に対し類似な歪曲をやったことであり、表面上は老子を標榜するが実際にはすなわち老子を曲解するのであり、老子思想中の政治的意味を正確に揭示することができないのである。この点に対し魏源は厳しい批判をした。特に諸子に対して魏源が彼らは正確に老子の「無為」を掌握することができずしかも偏差があることを思うのである。

「無為之道。必自無欲始也。諸子不能無欲・而第慕其無為。於是陰靜堅忍。適以深其機而濟其欲。莊周無欲矣。而不

知其用之柔也。列子致柔矣。而不知無之不離乎有也。故莊列離用以為體。而體非其體。申韓鬼谷范蠡離體以為用。而用非其用。」（見《論老子》之一。）

老子思想は「無為」を以て概括することができるのである。しかし諸子は却って正確に老子の無為の道を理解することができなかった。魏源の分析によればこれは彼らは無欲になることができないためである。だから正確に無為の道を理解できずしかもただ老子の無為の道を歪曲して「陰静堅忍。深其機以濟其欲」の岐路に向かって歩むのである。莊子は無欲になりえたといえども但し無為の秘訣を運用することを知らずだから現実を超越した道に向かって歩むのである。列子は老子の道の柔を運用することが分かるといえども但し「有無」の關係を知ることができないので、だから清虚の道に向かって歩んだのである。この二者ともに現実政治に対し作用を生じることができないのである。故に老子の現実政治に対し作用を発揮することができない無為の道と同日には論じられないのである。莊子と列子の欠陥は老子の道の「体」と「用」を分割してしまい、統一して理解し掌握することができないのである。故に両方ともに老子の無為の道を真に繼承することができないのである。またその後の申不害・韓非子・鬼谷子・范蠡などの人たちは老子思想に対しその理解と掌握は莊子・列子に比べられるとさらに落ちるのである。その根本的な弊害は正に莊子と列子と相反することであり、しかも老子無為の道の根本を離脱し、ただ老子思想の幾らかのうわべを運用するしかないのである。彼らは老子思想を現実政治に運用することを重視するといえども但し老子無為の道の精髓を把握することができず、故に莊子と列子と同様に老子思想が現実政治に対し指導作用を発揮することができないのである。

魏源は無欲することができなければすなわち真に老子の無為の道を掌握することができないのであり、諸子たちはすなわちこの種の欠点を犯したのである。魏源はこの層の原因を指摘することだけに満足することができなくて、彼はさらに

一步進んで人たちはなぜ無欲することができないのかを分析するのである。

「以急功利之心。求無欲之體不可得。而徒得其相反之機。以乘其心之過不及。欲不偏不弊得乎。老子競競乎不敢先人。不忍傷人。而學者徒得其過高過激。樂其易簡其捷。而內實決裂以從己。則所見之乖謬使然也。莊子天下篇。自命天人。

而處真人至人之上。韓非解老。而又斥恬澹之學恍惚之言為無用之教。豈斤斤守老氏之學者哉。」（見《論老子》之三。）

無欲することができないのその根本的な問題は「急功利之心」にあり、功利を追求したいならばすなわち作為をしなればならないのである。これはすべて一種の欲望がその背後で支えるからで、だから功利を求める心がますます急になると、その無欲を求めることますます得がたいのである。この基礎の上に立ってまた老子の無為の道を得ようとしてもどうしてできようか。功利の心を有すれば人と争う、すなわち他人より先にする、すなわち他人を害する。そうでなければすなわち功利を求め得ることができないのである。この一切は正に老子の無為の道と逆の方向に向かって進むのである。

もう一つの弊害はすなわちただ老子思想の高すぎ、過激なところを見ただけでむやみに清高孤寂と反世俗などを求めて個人の修身養性を追求することである。これもまた老子思想の原義と符合することができないのである。ある人はこの偏差を生じて過高・過激的な岐に向い進み、すなわち全面的に老子思想を掌握することができないのである。ただその一つを見ただけでその余を知らないのである。例えば莊子の論調が高くないとは言えないが但しそれは結局老子思想の原意ではなく、これ正に彼の「所見之乖謬使然。」ことであり、しかも老子思想が然らしめるのではないのである。

また韓非子が老子に対する解釈のようにすなわち老子の無為の道を批評して無用の教となすのである。これも同様に功利の心より然らしめるのであり、正確に老子思想の原意の解釈を遵守するものではないのである。

老子の太古の治は魏源から見ると本来なら天下社会においては甚だ大きな作用を生じるはずなのである。但し西漢の前

期に人たちがこれを運用したことを除外すると全体の中国歴史上に於いて老子思想は却って有るべき作用を発揮することができなかったのである。この一現象について魏源はこれは後世の解釈者の誤解のせいと考えた。すなわち後世の人たちが老子の思想を誤解することによって初めて老子思想が世に無用な結果をもたらしたのである。

「老子言絶仁棄義。而不忍不敢。意未嘗不行其間。莊周乃以徜徉玩世。薄勢力遂訶帝王。厭禮法則盜聖人。至於魏晉之士。其無欲又不及周。且不知無為治天下者果如何也。意糠粃一切。拱手不事事而治乎。卒之王綱解紐。而萬事瓦裂。刑名者流。因欲督責行之。萬物一付諸法。而已得清淨而治。於是不禁己欲而禁人之欲。不勇於不敢而勇於敢。不忍於不忍而忍於忍。煦煦孑孑之仁義退。而涼薄之道德進。豈盡老子道乎。豈盡非老子道乎。」（見《論老子》之三。）

後世の老子を解釈する者は多く《老子》の字面の意味についてのみ理解するのであり、例えば老子が「絶仁棄義」と言ううとすぐ老子の道は社会に関心を持たないことだと言うのであり、そうして人たちはこれを引伸してついに莊子あの種の「徜徉玩世、薄勢力遂訶帝王。厭禮法則盜聖人。」の道を走ることになる。あるいは魏晉の名士のような「糠粃一切。拱手不事事。」の偏向を生じ、あるいは申不害、韓非子などの刑名家の「萬物一付諸法」の極端に導かれて行くのである。これらの誤解はすべて老子のいわゆる「絶仁棄義。」と関係が有るのである。だから魏源が特別に老子の仁義礼に対する態度を説明するのである。彼は老子は別に仁義礼に反対するのではなく、それは仁義礼などを重んじる孔子思想も別に矛盾ないと考えるのである。

「老子言我有三寶。一慈。二儉。三不敢為天下先。慈非仁乎。儉非義乎。不敢先非礼乎。」（見《論老子》之二。）

魏源は、老子の「三寶」を用いて孔子の仁義礼に対応させて、これを借りて老子は世俗社会の必要とする仁義礼に反対するのではない証明とした。もちろん、老子の思想と孔子の思想は完全に一致するものではないのである。魏源はこれに

対しても分析がある。

「老子與儒合乎。日否否。天地之道。一陽一陰。而聖人之道。恆以扶陽抑陰為事其學無欲則剛。是以乾道純陽。剛健中正。而後足以綱維三才。主張皇極、老子主柔賓剛。而取牝取雌取母。取水之善下。其体用皆出於陰。陰之道雖柔。

而其機則殺。故學之而善者則清淨慈祥。不善者則深刻堅忍。而兵謀權術宗之。雖非其本真。而亦勢所必至也。」（見《論

老子》之四。）

魏源から見れば儒家と道家は正に一陰一陽と配合して成ったものであり、すなわち両方とも相手を失うことができないのである。なぜならば天地の道はすなわち一陰一陽であり、いかなる一方が失われても天地の道は正常に作用を発揮することができなくなるだろう。儒家と道家も同様である。人類社会に対してこの二家の思想はすべて有用である。しかし魏源もまた老子思想を学習するときにある結果を造成する可能性があることを指摘したのである。すなわちこれを学んで善になる可能性あり、またこれを学んで不善になる可能性もあるのである。学んで善になったものは、はじめて老子思想中の太古の道を余すところなく發揮する可能性があるのである。しかし学んで不善になったばあい、すなわち莊子や魏晉の名士や申韓の流のようであり、更に甚だしき者は兵謀權術にいたることを引き起こすのである。もちろんこのすべては老子思想の本来の内容でないのである。但し老子思想によってこれらのものを生じたのもまた自然の勢いなのである。このひとつの現象に対して人たちは完全に輕視することができないのである。この問題を提起する理由はすなわち現実の中に大多数の人たちが老子思想に対し誤解があるからである。しかも真に正確に老子思想の本義を理解する人はほんのわずかな人であり、これもまた否めない事実である。斯くの如くなので魏源はすなわちこの一点を指摘する必要があると感じた。もしこの一点を認めないと、すなわち老子思想とこれらの似ているようだが似ていない思想の間の関係をよく解釈することが

できないのである。魏源が老子思想と儒家思想との違いを説明するのはもう一つの目的があり、それはすなわち少なからざる人が老子思想を解釈してついに儒家思想にしたからである。これは《老子》を解釈する史上に於いてまれに見ることではないのである。魏源はこの様に《老子》を解釈することは悪い作用を引き起こし、すなわち人が老子思想の真面目を認識することができないことと、具体的に言う、すなわち人に老子のいわゆる太古の道をわからせることができないのである。おそらくこれらの解釈者はすべて一面的な善意であろうが但しこの種の善意は却つてあるべき作用を引き起こすことができないのである。だから依然として老子思想と儒家思想の相違をはっきり指摘することが必要なのである。このほかに魏源はまた特別に一個の道理を説明したのである。

「内聖外王之學。闇而不明。百家又往而不返。五穀夷稗。同歸無成。悲夫。知以不忍不敢為學。則仁義之實行其間焉可也。」（見《論老子》之三。）

儒家の学はいわゆる「内聖外王」の学であり、現実の中でよりいっそう光彩を放つことができないのである。諸子百家も一條の正路見いだすことができずかえつて思想の領域で一面の混乱を引き起こしたのであり、人に真偽を見分けさせることができないのである。この種の情況のもとで老子思想「不忍不敢」の道を提唱し、陰を以て陽を済けることはその中にひそかに儒家思想の仁義を含む、これを以ていわゆる太古の治を実現することも良いのではなからうか。

魏源は老子思想と仏家思想との異同についても説明したのである。

「老子與佛合乎。曰否否。窈冥恍惚中有精有物。即所謂雌與母。在佛家謂之玩弄光景。不離識神。未得歸於真寂海。

何則。老明生而釋明死也。老用世而佛出世也。老中国上古之道而佛六合以外之教也。故近禪者惟列禦寇氏。而老子固與禪不相入也。」（見《論老子》之四。）

老子思想の解釈者の中である人は仏家思想の角度より解説を行うのであり、これに対し、魏源はわざと老子思想と仏家思想との相違を説明したのである。彼が老子思想と仏家思想の根本的に違う点は「老明生而釈明死。老用世而佛出世。」にあると考えたのである。「明生用世」とはすべて人類の生存の意義及びその活動の原則を語り、しかも天下社会の治に関心することを以て中心と為すのである。「明死出世」とはすなわちこれと相反し人類社会の事務に不関心で、また人生の意義及び原則を研究しないのである。このような相反する思想はどうして無理に一緒くたにすることができようか。

老子は恍惚の中に精あり、物ありと語るのである。これは道の本体の特有の本質であり、しかもこの種の思想は仏教の角度から見ればすなわちこれは神を知ることを離れず未だ真空の境地に到達することができないのである。だからこの二家は本体論においてもやはり根本的に合わないのである。

更に一点を語ると、老子思想は中国本土で古代より存在していた文化であり、しかも仏教はすなわち六合以外より中国に伝来した中国の宗教である。二者の由来が違うので、だからそれも二者を一つにまとめるができないのである。老子思想の系統から比べると言うとした列子と仏教の禪宗に近いが、老子思想の本身は禪と毫も関係がない。仏家思想を用いて老子思想を解釈する人はすべて老子を誤解していると言えよう。彼らの解釈はすなわち信じることができないのである。

魏源が《論老子》の中で老子と儒・仏二家の違いを区分するゆえんは突き詰めていうとやはり自己の、老子学は太古の道と為すの説を論拠を提供したためであり、以て自己の見解の確信度を強めることただそれだけのことにほかならないのである。

(二松学舎大学文学部教授)